

Title	ルソーの転期：『新エロイズ』のクラランと『エミール』第五編における幸福な生活のイメージについて
Author(s)	松本, 勤
Citation	Francia (1964), 8: 12-28
Issue Date	1964-12-28
URL	http://hdl.handle.net/2433/137502
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ルソーの転期

『新エロイズ』のクラランと『エミール』第五編における
幸福な生活のイメージについて――

I

『新エロイズ』には、クラランにおいて、ヴォルマールとジュリを中心とする幸福な小社会を、その細部にわたって観察し報告したサン・ブルーの手紙がいくつかある。クラランの名は、当時のルソーにとって、ユートピアとしての価値になっていた。『エミール』は、ソフィと結ばれるまでのもの語りであるから、二人の実際の生活は示されない。しかし、かれらに示唆される幸福な生活のイメージは、クラランのそれにきわめて近い。

クラランの小社会や、エミールを待ちうけている幸福が、根本的な社会変革をへずに成立していることに注目したい。クラランは不平等な身分社会である。それは、『不平等論』の暗く鋭い分析があまりにきつた不幸な「社会」の条件を、けっして払拭してはいない。それにもかかわらず、クラランの色調はあくまでも明かるい。

松 本 勤

隷従も陰うつさもないと、作者は強調する。『不平等論』や『社会契約論』の読者は、そこに一種のとまどいを覚えないうか。

『ジュリ』や『エミール』の基調は、われわれに、怒りと焦燥と不満にみちた初期の論文とは、異った精神的基盤を予想させる。ルソーの矛盾とよばれる一連の対比が存在することは、だれもが知っている。闘うルソーと夢みるルソー。ストア的な禁欲と怠惰な安楽。人間の社会的解放と個人的解放。革命的な社会思想家と孤独な散歩者。これらの両面をルソーが合わせもっていたことは疑いない。しかし二律背反する原理を、同時に、同じ強さで持つことはできぬ。ルソーの生涯を調べると、彼の生活を律する主要な傾向が、時と状況の変化に応じて、一方から他方へと移行をくりかえしているのがわかる。この主導原理の動きとその理由を知ることが、ルソーを知ることにつながる。

初期論文が右の対比のはじめの系列に属するならば、『ジュリ』

や『エミール』はあとの系列に接近している。われわれはこの両者のあいだに、ルソーの一つの転換を想定している。それは、レルミタージュ・隠遁のちまもなく生じた自己革命の崩壊にはじまり、百科全書派との決裂によつて決定的となる。ルソーみずから、この時期の内的状況の変動を「第二の革命」とよんだ。⁽¹⁾この小論の目的は、『新エロイズ』の書簡IV—10、V—2、V—7など、『エミール』の第四編後半とくに第五編、にみられる幸福な生活のイメージとその構造の特徴を、さきの変動とつないで考えるところにある。生活と思想のさけがたい結びつきをこの移行はものがたるであろう。

註(1) Les Confessions, p. 418. および p. 1463の解説参照。

引用の頁数は次の版による。『告白』は B. Gagnein および M. Raymond 編のフレイブド全集版 (Conf. と略記。) 書簡は Dufour 編の Correspondance Générale (C. G.)。『エミール』と『学問芸術論』は Classiques Garnier 版。政治論文はヴォーン版。『新エロイズ』は手紙の番号で示す。

▲クラランの社会▼

『新エロイズ』を読んだ人は、ブドウのとり入れの幸福な情景を忘れぬであろう (V—7)。労働のよろこびと人々の和合のたのしさ。それはクラランにおいて平等が成立する唯一の日である。ジュリの一家は使用人と仕事や食事をともにする。「甘美な平等」を語るルソーの筆は熱をおびる。しかしただ一日の平等の甘美さは、平素の不平等のつよさを物語るにすぎない。「あらゆる人々

は、平等でありながら、しかも自分の身分を忘れる者は一人もいない。」「わたしたちが彼らのためにわたしたちの身分から下がるのを見て、それだけ一そう彼らは進んで彼らの身分から一歩も出ようとはしないのです。」「甘美な平等」は領主の側から示される仮りの姿でしかない。ヴォルマール一家は、この日には、百姓たちに羨望をおこさせないために質素な装いをせねばならない。「クララン」は幸福な不平等社会というパラドカルなユートピアである。いますこしくわしく見よう。

クラランの体制は、ヴォルマール一家と、かれらの召使 (domestiques)・中庭の使用人 (domestiques de la basse cour)・日傭労働者 (ouvriers à la journée) との間の上下の秩序に依存している (IV—10)。ジュリは解雇という生殺与奪の権利を持っていて、秩序の乱れることはない。かれらを怠慢におちいらせることなく、生産性を十分に確保するために、功利主義的な支配の方法がとられる。日傭労働者には普通の報酬がいかに賞与が用意され、その算定は別の使用人にまかせられる。後者にはクラランの全収入にたいする歩合制が採用されるから、かれらは「他人の労働に関心を持つ」。ジュリは毎週もつともよく働いたものに二〇バーツを手える。次の文章はこのユートピアの功利的なからくりを、ルソーみずから認めたものである。「共和国においては公民は習俗、原理、徳をもって抑えられています。けれども、召使は、金で動く者は、拘束をもつてする以外にいかにして服従させることができましよう。主人の技術はただこの拘束を快楽もしくは利益の仮面の下に隠し、彼らが強制されている一切のことを自ら欲しているように思わせるにありま

す。」(IV—10)

従属や競争はルソーのもっとも忌みきらったものであったはずである。『不平等論』における、利害対立、競争、*être* と *paraitre* の分離、独立と自由の喪失、といった人間の最大の不幸を、私有財産と不平等にもとづく社会関係と結びつけたすばらしい分析を、われわれは知っている。クラランは、不平等社会の原理に基づきながらも、あらわれは和合の幸福であるという奇妙な共同体である。それは、自分を他人らしくみせる仮面を必要としない。「身分の等しい人々が：お互の間に同一の職務を割りあてることのできた」場合のような連帯性をもつ(V—12)。人々は、あたかも社会契約を結んだかのように、「他人のために働くことが必ず自分自身のために働くことになる (Contrat, p. 44)」意識をいだく。

不幸であるべき条件を幸福にかえたものは何か。それは主人の人格であり愛情である。愛情が利害の対立を消しさり「主人の神聖な利益」を尊重させ、そのためには召使どうしの告発も正当化される。クラランの体制の内部には、ルソーの批判の目はむけられていない。もちろん「甘美な平等」すらもありえない時代であったことを忘れてはならない。よりすすんだ平等のイメージは空想にすぎて小説に描けなかったのかもしれない。使用人論や取り入れのシーンも、当時のアクチュアルな問題に密着して、啓蒙的な意味をこめて書かれたのであろう。しかし、当時にあつて個人利益と共通利益の融和の困難をだれよりもよく知り、人間の社会的疎外の問題にだれよりも早く透徹した解釈を試みたルソーが、体制の矛盾を合理化しながら、人格共同体を強調していることは、やはり注目にあたいする。

クラランの社会は、それでは、ルソーの政治論文などにみられる理想社会のイメージと、厳密にいつていかなる点で異なるのか。

ルソーは、自然状態にはじまり、社会のさまざまな段階をへて現在の不自由、不平等の社会にいたる墮落の歴史を想定している。未来の理想はより自然へと回帰するところにあるが、どの段階までさかのぼるかによつて理想のイメージは異ってくる。まだ明確な構図をとりえない萌芽的なイメージが数多くあつて、それをどう扱うかによつて見方にかなるのひらきが生じる。上山春平氏は、マルクスと比較しつつ、ルソーの理想社会が、平等な私的財産の所有を条件とし、生産手段の所有者としての小生産者を構成員とし、小経営による農業生産を主要な経済的基礎とする自由で民主的な農業社会であるとして、それは、マルクスの歴史過程の中では「ギリシャ・ローマ的共同体」に位置する、と結論される。本源の蓄積期におけるプチ・ブルジョアの希望の表現、という位置づけである。

この構図とクラランとをくらべてみよう。かなりの類縁性が指摘されるであらう。とくに次のような自給自足経済の構造は、ルソーの理想そのままである。すなわち、交換をできるかぎり排除し、生産物を使用と直結させる。金銭による売買をさけ、金利を迫いもとめたり資本の増大をはかったりしない(V—12)。ヴォルマールのみに注目すれば、彼が小農民でないにしても、クラランはかなりルソーの理想に近い。しかし、多数の使用人たちがすべて平等の生産手段を有する自営農民とならないかぎり、理想からはるかに遠く、自由で民主的な社会ではない。このような結果は、そこに社会の基本的な変革が存在しないことからきている。ルソーの時点においては、

革命がないかぎり、平等は存在せず市民も存在しなかった。クラランは革命にかえるに隠遁者の自己閉鎖に依存しているために、既存の社会秩序をうけいれなければならなかったのである。隠遁の側に立つルソーは、すでに変革の希望を失っていたのであろうか。

註(1) 上山春平「革命と平和」(「思想」一九六一・十一)cf. フランス革命の研究」p. 281-2

△「エミール」・心の中の自由△

『エミール』を読めば、そこに『不平等論』第一部のイメージが強烈にはたらくていて、誰しもみてとるであろう。両者の密着性を検証するのは容易である。幼いエミールの成長過程において、われわれが人間生活の基底に達する批判を感じるのは、彼がこの「自然」という反社会の原理によって純粹培養されるからである。しかし、批判の急進性は、エミールが社会生活をはじめるとただちにおとろえる。何故であらうか。

エミールはなによりも「たえず他人にふりまわされる状態にあなただを置き、悪者からのがれるためにあなた自身悪者になることを余儀なくさせる社会関係(p. 581-2)」から遠ざからねばならない。土地を耕し隠れて生きる道が、かれの道である。現実の変革の道がとざされ、自分を隠遁者として規定した以上、すでに成立している風習や秩序とのなんらかの妥協は避けられない。エミールの生が批判性を減じるのは当然であろう。かれには、秩序や法が、たとえ虚偽と口実にすぎないとしても、それを彼の良心において純化し、有徳で正しい個人として生きるいかに方法はないのである(p. 605)。

クラランの生活がエミールの理想であった。第四編のおわり、第五編のあちろちに、クラランの幸福のイメージが熟っぽくちりばめられている。ルソーは自分の果せなかった夢を、かれの生徒たち託したのである。一例をあげる。

「世間を離れ、簡素な生活を送りながら、エミールとソフィは、周囲の人々に多くの恩恵を施すことだろう。人口はふえ、土地は豊饒になり、大地は新たな装いをつけ、多くの人々と豊かな産物は労働を祝祭に変え、ひなびた遊びごとが、それを復活させた愛すべき夫婦を中心にひろげられ、歓喜と祝福の叫びがあがる、そういう光景をわたしは見ているような気がする。」(p. 606)

『エミール』の中に、ルソーは『社会契約論』の(ドゥラテによれば『政治制度論』の)要約を挿入したではないか、という反論がでよう。その通りである。しかし、「存在すべきもの」(国法の原理)を知ったあとで「存在するもの」(諸国の政治の実態)を判断した結果はどうであったか。

「自由はどんな統治形態のうちにもない。それは自由な人間の中にいる。」(p. 605)

この確認をへてはじめて、隠れて生きることの正当性が認められるのである。内心の自由というテーマは重要である。それは、きわめてルソー的であるし、同時に、ルソー的でない。『不平等論』の主題は、

「いかなる奇蹟の連鎖によって、強者が弱者に奉仕し、人民が現実の福祉の代償に、観念上の休息を購う、(acheter un repos en idée au prix d'une félicité réelle)ここに決心したかを説明すること」

(p. 140)であった。内心の自由は現実の不自由の觀念上の解放にすぎないことを、ルソーは知っていたのではなからうか。不平等社会では「自由な人間」は存在しえないと、かれは主張したのではなかったか。

心の中の自由という主題は、すでに第一論文のときから存在していた。しかし、それが決定的な重要性を獲得するのは『ジュリ』と『エミール』の時期においてである。そこにおいては、はるかに『孤独な散歩者の夢想』が準備されており、政治の側面においては、『ポーランド統治法案』につらなっている。

△『社会契約論』構想の時期▽

初期の政治論文と、『エミール』や『ジュリ』のこれまで注目してきた側面との間に、一つの論理の転換のあることを知った。われわれは前者から後者へのルソーの移行を予想している。それでは『エミール』と『社会契約論』とがほぼ並行して執筆されたという厄介な事実をどう考えるべきか。『社会契約論』は、「出生によって得た思考の権利」を行使したのみであって、現実への適用は考えていなかった(Conf. p. 405)、というルソーの言葉を信用したとしても、それは決して夢想者の漠然としたニュートピアではない。

われわれは『社会契約論』が『政治制度論』の一部の断片をぬきだしたものであるという事実注目しなければならぬ。『政治制度論』の着想は、『告白』によれば、一七四三年、ヴェネチアで「すべてが政治につながる」と知ったときにさかのぼる。それ以後の長い思想形成の期間のなかで、『社会契約論』の直接的母体が成立し

たのはいつか。

『政治制度論』の一部であり『社会契約論』の第一稿と考えられるものに、いわゆる『ジュネーヴ草稿』がある。主題においても思想においても、草稿と決定稿のあいだには緊密な類似がある。こころみにヴォーン版のテキストをひらいて、草稿の第二編第二章(立法者について)と本文の第二編第七章とを比べていただきたい。草稿の約一ページほどが本文に省略されているが、論旨の展開はもとより、キーワード、パラグラフの切り方も同一であり、差異はほとんど修辭上の配慮によるものであることを発見されるであろう。全く同じ文章もある。これらの異同をくわしく調べたユベールは、『社会契約論』の主要な思想はほとんど草稿に見いだされ、草稿に存在しない部分も、すでに示された思想の展開か接合である、という。⁽¹⁾

『ジュネーヴ草稿』は、『不平等論』完成ののちジュネーヴ滞在中に書きはじめられ、でき上ったのは一七五六年と考えられる。草稿の「人類の一般社会について」と題する章が百科全書第五巻所収のディドロの『自然法について』を批判したものであり、後者はディドロが印刷と並行して執筆し、一七五五年十一月に発表されたという事実によって、五五年末から五六年という日付けが推定されるのである。それはレルミタージュに移り、理論的著作に必要な「沈思と閑暇と平穩」を得て、いさんで『政治制度論』にとりくんだ、という『告白』の記述と一致する。もちろんこの日付けは下限であって、基本構想はすでにより早い時期に出来上っていたと考えられる。

わたしが年代をこまかく詮索したことには理由がある。一七五六年、レルミタージュにおける最初の著作活動の時期のおわりとともに、かれの「第二の革命」がはじまるからである。『ジュリ』はこの一連の変化のあとを追って書かれる。『エミール』は「二十年の構想と三年の努力」を要した著作であるが、実際の執筆はもとより思想的結実もおもにこの変化の後に属する。『社会契約論』は、完成や出版は『エミール』と同時期であるが、むしろ前期に属すると考えてよい。既存の原稿を整理し編成する仕事に、かなりの意欲を必要とすることはもちろんだが、多くの法学者や百科全書派の理論を追跡してそれを理論的にのりこえるという思想の仕事、およびその思想にはじめて言語による表現を与えるという努力の方が、はるかに強い緊張と充実したエネルギーを必要とするであらう。

ルソーの移行にたいして、かれに希望を与えなかった時代や社会という外ワクを見ることも正しいし、理論そのものの中に原因を追求することも正しい。しかし同時に、それらと結びついて、ルソーのより身近な環境の変化が、日常的な生活の錯綜の中で、かれとその思想を除々に動かしていった事実も指摘されねばならない。次章の課題である。

註(1) Hubert: Rousseau et l'Encyclopédie. Chap. IX, pp.

115—120

- (2) 政治思想の形成についていえば、一七五四年にすでにルソーはその主要なものを保持していたと、ドゥラテは推定してゐる。Derathé: Jean-Jacques Rousseau et la science politique de son temps. p. 59

- (3) 社会改革にたいして絶望の方向にむかう『新エロイズ』以後の著作と、『社会契約論』を含めて前期の著作とを区別する考えは、すでに桑原教授によって示唆されている。「ルソー研究」p. 335

II

一七四二年パリ到着いらい公権力による本格的な迫害がはじまるまでの二十年におよぶ期間において、ルソーの人生や思想を考えるうえで、とりわけ重要な意味を持っていると思われる二度の危機的な時期に注目したい。

第一回は、一七四九年、ヴァンセンヌにディドロを訪れる途上にルソーをおそった「発見」と「熱狂」いざんの、かなり長い時期である。それはルソーのそれまでのパリ生活の決着であったと考えてよい。資料は乏しく、われわれは『告白』とわずかの書簡から推測しうるにすぎない。この危機は、「発見」と第一論文と、その結果としての自己革命によってのりこえられる。「当代の道徳や処世訓や偏見を軽べつしきって(Conf. p. 417) 自己主張を徹底させた自己革命が、その後の一連の論文の精神的基盤である。『フランス音楽について』を発表したために宮廷からの迫害寸前という状況のもとで、反社会の主張をつらぬくことによって、『不平等論』は書かれている。

第二の危機は、一七五七年冬、グリムやデビネ夫人との決裂の後である。失恋の痛手にくわえて、今度は、晩年までルソーを苦し

めてやまない『謎』と『陰謀』をめぐる葛藤の、最初の明確なあらわれという特徴をもっている。「最期の時のやってくるのが何か待ち遠しい。友情の幻想から目をさませられ、人生を愛させたいっさいのものからひきはなされ、もはや人生を楽しくしてくれるものは何ひとつ見あたらない(Conf. p. 489)」と『告白』に記されている。

『新エロイズ』後半部と『エミール』は、この危機体験とふかいかかりをもっている。著述がルソーを救ったといってもよい。

『エミール』第五編が書かれた一七五九年には、ルソーはすでに身辺の平穏と精神の平衡をとりもどしている。当時の書簡にみる次のことは、自己革命とは異った心境をあらわしている。「孤独者はロマネスクな心を持っています。わたしはこの心で一ぱいです……それがわたしを幸福にしてくれるからには、どうして、こんなにも甘い熱狂を癒そうと努めましょうか。」⁽³⁾

パリ時代と隠遁時代の制作の動機のちがいを、ルソー自身は次のように語っている。「これまでは道義的な憤慨がわたしにとつての詩神であったが、このたびは、たましいの甘いやさしさがそれになった。(Conf. p. 495)」

ルソーのこれらの危機は、なんらかの意味において、その後の著作によってのりこえられている。二つの危機の本質を見分けることが重要である。

註(1) その他、ブレイアド版『告白』の解説(pp. 1368—9)やその詳細な註釈に依った。

(2) cf. R. Hayens: *Hardiesse de Rousseau* ("Europe",

39^e Année, Nov.—Déc. 1961, pp. 149—152)

(3) Let. à M. de Luxembourg, le 27 mai. C. G. t. IV, p. 256

《自己革命とその崩壊》

ルソーは少年のころから不平等の苦しみをなめてきた。つよい空想癖がそれに輪をかけた。夢の中の英雄と現実の低い身分のワキ役との落差——「なんだーやっぱり下男奉公か！」(Conf. p. 92)他人に支配されずに独立して生きるという希望は、彼の心をはなれることはない。ヴァランス夫人のもとでも経済的に依存している抵抗感はなくいされず、「独学」にはげんだのも、単なる趣味ではなく、立派に生計をたてて夫人に借りを返そうという意図があった、とスタロバンスキーは指摘する⁽¹⁾。

パリの生活は、出世と名誉をもとめたルソーの挫折の記録である。それはみずからの才能と人間的価値にたいする誇りと、社会が自分を扱う位置の低さとのギャップからくる苦しみに塗りつぶされている。ブザンヴァル夫人を訪問したさいに、台所で食事を供されようとして、辞去しようとする、ルソーの自負と現実の相違を端的にものごたるエピソードがある。かれの初期論文には、身分社会によって強いられた若き日の屈辱の記憶が秘められているのを、忘れるべきではない。適応の努力と挫折という同一パターンを、彼はなんどもくりかえしている。第一論文までに明瞭な形をとった契機が、少くとも三度ある。第一回は音譜法に関して。第二回はモンテーグ事件。自分のさい配でかなりの仕事ができ、従僕をもつ身分になって、かれの自尊心はみたされる。一般に、特異な個人としての価値評価を要求した後年の彼の自己主張の複雑さにくらべると、この時期では、

ルソーはまだ、かなり地位や名誉という社会の価値規準のワク内にあったといえる。挫折にはやはり身分が付きまといっていた。「貴族でもない秘書が：一國の君主といっしょに食事しようというのか？(Conf. p. 310)」第三回は「恋のミュージズたち」をめぐる。失望は大きかった。

「わたしは出世や名声を求める計画をすべて放棄した。：生活の世話ならしてやろうという人たちの気持ちにすがって、自分とテレゾの生活費をかせぐことに時間と努力をついやした(Conf. p. 323)」社会に屈服したとき、ルソーの矛盾は尖鋭化し、危機をはらんだ。貧困、雑用、従属、一七四八年の病氣。

以上の簡単な素描は、自己革命を理解するうえでどうしても必要であった。自己革命は、それまでの生活の論理を完全に逆転させたところに成立するからである。ヴァンセンヌへの道で「この瞬間からわたしは破滅した」と言わせるほどの強いひらめきは何であつたか。『学問芸術論』を注意ぶかく読んでみよう。ジャン＝ジャックの存在全体をゆるがす次のようなかくれた論理がよみとれるであろう。文明社会(さしずめそれはルソーに屈辱をなめさせたパリでありラモーである)の悪によって不幸な人間がうまれる。しかしそれは本質的には彼が悪いのではない。現在の社会でその価値に依存して生きるならば、不幸は必然である。適応に失敗した自分こそ、実は正しい。かれは自分を抑圧した社会にはなく、抑圧されたわれの側に徳をみた。ルソーは疎外の要因を、素朴な形で、直覺的に、しかし部分的には根底に達する鋭さでもって察知した。第一論文の雄弁なレトリックの奥に、この発見のはげしい心の動きをよみとるべきで

あろう。

社会の不正と自己の善を直覺したとき、二つの態度が可能であった。一つは、さらに一步ふみ出して闘いを宣言する態度。もう一つは、逃避して消極的に自己の独立を守る態度。『学問芸術論』もやはり二つの読み方を可能にする書物である。悪の社会的関係における追求のかたに革命を予想させる側面、および、自己の良心のなかに回帰する美德の個人的側面。その後のルソーの著作は、さしあたり彼が前者の途上にいたことを示している。執拗なたたかいを経てはじめて隠遁が敗北ではなくなる。社会によって屈服させられたばかりの、屈辱感の癒えぬ時点において、隠遁と逃避の姿勢をみるよりは、闘いと自己主張のそれを認める方がはるかに自然である。

自己革命は闘争宣言である。かれを翻弄してきた社会の価値規準の一切を否定することによって、ジャン＝ジャックは社会と平等に對立する。かれ一人が全世界とむかいあうのである。マルゼルブ宛の手紙をよむと、ルソーは自己革命から後を一つなぎにして、そこに一貫した隠遁の原理を認めているが、それは隠棲を正当化する必要がつよくはたらいたためであって、そのために自己革命を当時(一七六二)の彼の志向でぬりつぶしたのである。レルミタージュ以後の隠遁気分をここに認めては、第一論文をめぐる論争、『不平等論』、『政治経済論』、『ジュネーヴ草稿』、とやつぎばやにつづくルソーの仕事の意味も積極性も見失うであろう。

右の解釈は自己革命が個人的な性格の深層部と結びついていることを否定するものではない。「隠れる」欲求がルソーを動かしたことを見逃してはならないであろう。ルソーには、社会的承認の欲求

と、社会から隠れる欲求が共存していた。⁽⁵⁾『告白』の記述を追ってゆくと、まさに脚光をおびようというときに、しばしば不意に身をひいてしまうという行動のパターンを窺見するであろう。持病や他人のおもわくについたという敏感、わずかの恥辱にもたえられない自尊心、さらに「あらゆることにびくびくし、社会生活のほんのちよとした義務にさえたえられない(マルゼルブ宛手紙)」不適応、それを自ら知ったルソーの自己防禦のための反射的な行為といえる。第一論文の当選が約束した派手な社会的活躍の想像は、自尊心を満足させると同時にたえがたい嫌悪をうえつけたのではないか。自己革命の姿勢の中に、ルソーはむしろ自己主張とともに自己の安全をみてとったのではないか。

「隠れる」ことは、レルミタージュ以後では、隠遁という逃避の方向において、ルソーの生活と思想の一つの軸となる。自己革命の当初では、この傾向はヒロイズムの高揚の中の二次的な動機にすぎぬ。第一の危機がもたらしたものは、社会との正面からの敵対であった。後年、第二の危機のときの『レトル・モラル』や『サヴォア助任司祭』における、良心の内側へのひたすらな宗教的滲透にくらべると、この時期の努力は、個人の不幸の問題を社会構造との関連において把える方向に結実する。『不平等論』における、情念のありかた・直接的な人間関係・社会構造・生産の技術、という重層構造の分析はその輝かしい勝利の一つであろう。それは不平等社会の下位に属するものとして苦しんだルソーに、まことにふさわしい仕事であった。

註(1) J. Starobinski: «Tout le mal vient de l'inégalité»

“Europe”, op. cit. p. 138 「彼の理想は、たしかに感情の依存であるが、それは経済的な独立のうちにおいてである。」
(2) cf. Guéneno: Jean-Jacques II, p. 54, Conf. p. 377, note 1

「第二の革命」は自己革命の崩壊にはじまる。それを後年のルソーは「わたしの本性と正反対の状態」から自分自身に立ちもどるうごき、と考えている。つねに高い精神的緊張と生活全体の思想的統一を要求する全面的な反抗の姿勢が、微妙な感情生活をいつくしんだルソーとはあい違いぬものがあったことは、彼のことばの通りであろう。「人間の心に宿りうる偉大かつ崇高なもので、わたしの力におよばぬものは天とわたしの間で何一つなかった(Conf. p. 416)」とみずから語るような異様なテンションは、よほどの条件がそろわないかぎり持続しえないものである。ルソーの回想によると六年間、しかもそのうちの四年間は「この心の高揚が極点に達していた」事実(Conf. pp. 406—7)、むしろ目をみはるべきであろう。レルミタージュへの隠遁という事実の中に、すでにある変化が推測される。しかし、はるかに重要であるのは、隠遁の結果である。なぜなら、平穩な閑居は、憎悪の対象をばかし、矛盾の蓄積をふせぐことによって、批判を急進化し理論構築へとむかわせる契機をとりさるからである。

「この変化は、わたしがバリを離れるとすぐにはじまった。この大都会の悪徳を見て憤怒にかられることがなくなったのである。……眼の前の悪人どもを見なくなると、わたしは彼らを憎むことをやめた。……わたしは間もなく、長年心をうばわれていたあの熱狂か

なめてしまった (Conf. p. 417)。」

パリでは不平等社会が眼前にあった。出世や競争やさまざまな葛藤がうみだす情念の渦があった。ルソー自身、いっきに名声や野心と無縁になったと考えるのは早計にすぎる。みずから選びとった社会との対決のなかで、しかも、社会の中で反社会の原理をたてとおそうとするところからくる矛盾を一身に受けとめて、ルソーは仕事をしたのである。理論の実践はあらたな葛藤を生み、「隠れる」欲求はしだいにつよまる。『告白』第八巻はその間の事情をつたえている。

対社会の緊張がほどこれたあとには、異性の愛にみたされなかった自分をいとおしむ気持があった。それは空想世界への飛翔をみちびく。『ジュリ』の最初の二部、かれの「理想の世界」を「地上のこととはすっかり忘れて」ルソーははぐくんだ (Conf. p. 427)。以上が変化の第一段階、「第二の革命」のはじまりである。

つぎの相逢に注目しておきたい。生活は安定せず、能力は認められず、卑屈になることを強要された第一の危機にあっては、ルソーの矛盾の多くは、社会の矛盾と同一線上にありえた。無名の多数の一人としての疎外、被支配階級としての疎外という局面がつよい。それが矛盾の社会的追求のバネとなった。

レルミタージュへ隠遁したとき、ルソーは十分な社会的承認の満足をえていた。私は有名になった、と『告白』は何度もくりかえしている。自己革命のときとはちがって、社会への報復をかなりの程度になしとげていたといえる。自負心がつよく「おかしな奴と思われても平気だが軽蔑には耐えられない」ルソーにとって、かならず

しも彼の望んだような形においてはにせよ、対社会の自我がいちおうの満足をもったという事実は無視できない。この余裕はそれまでとはやや異った人生の見方を準備する。そして、彼を待ちうけているのは、今度は「おかしな奴」としての、特異な個人としての疎外である。自己革命の実践がすでに、それを用意し運命づけていたのである。

《不和・第二の危機》

レルミタージュへの隠遁は、ルソーの対人関係においても決定的な重要性をもつ。パリ時代にはまだかなり漠然としていた、ドルバック、グリム、ディドロたちとの争いが、ここに隠遁と孤独という明確な焦点をもつことになるからである。ディドロの『私生児』が出版された一七五七年二月には、ルソーはすでに自己革命を捨てて隠遁生活の平穩と安楽に身をまかせていた。Il n'y a que le méchant qui soit seul. の一句に挑戦をみたルソーは、自分は悪人でないことおよび隠遁は正しい行為であることの証明にむかって、その努力を集結させるであろう。ルソーとディドロ一派の一般的な関係については、最近のフーブルの研究⁽¹⁾にいたるまで、すでに数多く論じられている。ここでは、ルソーの思想の移行に關係するとおもわれる、一、二の特徴を指摘するにとどめる。

百科全書派との対立は、ルソーの隠遁以前からすでに、かなり明瞭であった。しかし不平等社会という当面の敵と直面していたルソーにとっては、不和はまだ一次的重要性をもちえなかった。反絶対主義という点では、かれらは味方でなければならなかったはずだ。隠遁生活を通じて、社会という外的矛盾が後退したときに、新た

な葛藤が焦点を結んだのである。直面する矛盾を全体のなかで相対化することなく、絶対化して受けとめるのは、孤独者の避けがたい必然であろう。ルソーの幸福を乱しにくるのは、いまや「社会」ではなく、「かれら」であった。ルソーはやがて「かれら」を「社会」と等置するであろう。

ルソーとディドロ一派との対立が、基本的には思想の相違によって規制され、ルソーの忠実な思想の実践によって表面化したものであることは、いうまでもない。しかし同時に、それと結びついて、ルソーが直接的に苦しんだのは、ある気質と他の気質の差、ある生活様式と他の生活様式の差、という局面においてであった。ディドロとの不和のはじまったころの書簡をよむと、日常の交際においてルソーがかなりの被害者意識を抱いていたことがうかがえる。異質の生活態度を「彼のほうでわたしの義務と思うところを押しつけてくる(Conf. p. 38)」不満。「わたしは孤独の中で幸福だった。君は孤独のうちのわたしの幸福をかき乱そうとした。」⁽²⁾彼らの対立には、人とはどのようなコミュニケーションのしかたで満足しうるか、という性格と生理の深部にさかのぼる問題があった。ごく小人数のまじわりで心の秘密を見せあって、はじめて幸福になれるルソー。⁽³⁾ささやかな心の秘密など抹殺しうるディドロの集団主義とヴァイタリティ。社会組織という平面においては直接的にはもりきれない、個人的な特殊をともなった問題が、ルソーにはきわめて重要になったのである。

初期の論文においては、人間は、もっぱら社会によって原理的にどのようなものにもなる可能性をもつ抽象的人間であった。政治論文としては当然であろう。「人民は長い間には政府がそうあらし

めようと思うものになる。政府が欲するときには兵士にも市民にも人間にもなり、政府の好むままに下層民にも悪党にもなる(Economie p. 248)。」批判は社会に政治に不平等にむかう。ルソーのこの論理が崩れるわけではけっしてない。しかし可能性としての人間の実現は、長い時と変革のかたにある。いまルソーが直面するのは、できあがった現実的な個性としての人間である。それは客観的、対象的な把握を困難にする性質のものであった。批難はルソーただ一人の特異な個性にさしむけられた。かれは「よい人間」「わるい人間」という発想でそれにむくいた。グリムに絶交状を書いた翌日のドゥ・ドト夫人にたいする手紙、「ああ、彼がオネットムでわたしが恩しらず、(…)ああ、もしわたしが悪人ならば、人類のこらす悪者です！わたしよりも立派な人間をわたしに示してほしい！」⁽⁴⁾

悪人と批難されたルソーがなによりも欲したのは、自分にふさわしい人格であった。彼はリュクサンブール公やキース元帥卿に、かれの求めるこのまじい人格を見いだしている。「性格がぴったり一致したことの奇妙な効果！」(Conf. p. 597)。「もともと、リュクサンブール公との交際において、彼が貴族であることにたいする抵抗感はおぼえていない。「あなたがたの一切の称号をどれほどわたしが憎んでいるか、…どうしてあなたがたはクラランにお住みにならないのでしょ。」⁽⁵⁾しかし実際には、階級差の意識をこえて公との交わりをよるこび、それによって慰め支えられていたと考える方が、事実に近い。『新エロイズ』の人格主義については、すでにふれた。現実社会から遮断された豊かな土地で、小教者である「よい人間」が多数の「わるい人間」から逃れて心のまじわりをむすぶ、という

クラランのテーマは、そのまま当時のルソーの念願であった。そのさい矛盾をきたすべき使用人との関係は重要さを失って、ヴォルマール一家がルソーの立場であることはいうまでもない。これはさきに指摘したルソーがすでに著名の士に列していたことと、あわせ考えるべきであろう。

ルソーにとって、百科全書派はなによりもサロンの人間であった。かれらとの対立を通して、都会のサロン派の人間、田舎に隠遁して幸福になる人間、という対立図式はもつとも重要なテーマとなる。レルミタージュへの逃避をディドロに皮肉られたルソーは、次のように正面から反ばくした。「あなたがた哲学者が都市の住民とのみ義務によってつながっていると思うのはこっけいです。田舎においてこそ人は人類を愛すること、人類に奉仕することを学ぶのです」

『エミール』においても、はつきりとディドロにむかって主張する。「ある有名な著者はひとりでいるのは悪人だけだと言っている。わたしは、ひとりでいるのは善人だけだ、と言おう(P. 99)。」一般に、『エミール』が敵対者としての百科全書派をつよく意識して書かれていることを、見逃すべきではない。『新エロイズ』の美しい描写のなかにも、野に隠れてあるものが正しく幸福である、という激しい主張がよみとれるであろう。クラランは、住人の性格、趣味、彼らの交流のしかた、経済構造から日常茶飯の生活様式にいたるまで、反バリ、反社交界の原理によってつらぬかれている。あえて図式的にいうならば、支配、被支配という社会の上下の構造にかわって、都市（文明社会）とクララン（理想化された田園）という平面的な対照へと、ルソーの批判の焦点が移行したと考

えられる。

『新エロイズ』や『エミール』においては、趣味 (goût) がたいていそう重視されている。趣味は、「ささいなことにおいて自分を知る技術」であるが、「人生の楽しさはささいなことから織り成されている」(Emile p. 436) ゆえに無視できないのである。当時、趣味論が流行したという事情もあるが、このような日常的個人的原理が、異質の生活態度との衝突を通じて隠遁生活という特殊を普遍化したルソーにとって、それまでもまして重要になったと思われる。閉鎖的なジュリヤエミールの社会では相似た個性を必要とする。趣味がかれらを結ぶ絆のひとつとなるのは、それが社会にありながら「自然」をより多く保存していることのあらわれであり、よい人格のあかしでもあるからである。

註(1) J. Fabre. Deux frères ennemis : Diderot et Jean-

Jacques (Diderot studies III, 1961)

(2) Let. à Diderot, le 16 mars 1757, C. G. t. III, p. 28

(3) Cf. 「散歩は、人数の少ないほど魅力が大きかった。その方が心が自由にうちあけられるからだ。」 Conf. p. 244

(4) Let. à M^{me} d'Houdetot, le 2 nov. 1757, C. G. t. III, p. 173 ルソー晩年の著作のモチーフがすでにここに明瞭である。平和を回復した五九年春にも、次のようなはげしい言葉が見いだされる。「生まれてこのかた、誰にせよ人にたいして、いささかなりとも悪事をはたらいたならば、その不幸はわたしの頭上におちるがよい。…重ねて申します。何のゆえをもつてあなたはわたしを裁かれるか。」(Let. à M. Tron-

chin, C. G. t. IV, p. 201) レンミタージュにおいてナゾと陰謀の疑いを語る『告白』の文章は、『夢想』の世界の骨格を示している。《moi, seul dans mon hermitage, loin de tout, sans avis de personne, sans aucune communication,...》

(5) Let. à M^{me} de Luxembourg, C. G. t. IV p. 297

(6) Let. à M. Diderot, le 16 mars 1757, C. G. t. III p. 29,

Conf. p. 459,

これまで述べてきた不和に、ドウドト夫人との不幸な恋愛が介在していたことは、いうまでもない。ここではふれないが、この失恋は、情念の自己規制の必要から、いっそうルソーを自己の内面の問題へとむかわせ、彼の隠棲の論理を完成させるのである。

一七五七年から八年にかけての冬、危機のさなかに、ルソーは、『レトル・モラル』とよばれる六通の手紙を書いた。ドウドト夫人に語りかける体裁をとった一種の幸福論であり、友人との不和や失恋という体験を整理し、人間の幸福とはなにかをみずから問うたものである。われわれはそこに自己の行為の正しさの根拠を求めて、内なる良心へと回帰してゆくルソーの姿をみてとることができ。哲学者たちの独断的な体系を批難し、人々がほころる理性の世紀が人間の幸福について無知であることを指摘しながら、ルソーの論法はひたすらに正邪を判断するものとしての良心へとむかう。第一論文のむすびとはるかな照応を人は感じるであろう。しかしトーンも方向ももちろん異なる。前者が『不平等論』へ集結してゆくべきものだ

とすれば、後者は『サヴォア司祭助任の信仰告白』に直結する。彼は『手紙』にすぐひきつづいて、その骨ぐみと多くの断片を利用して、『信仰告白』を書く。次の一節を、この二つの書物に書きしめたとき、ルソーは自己確認のあかしをえたと考えられる。「人間の心の底には正義(と美德)の生得的な原理があつて わたしたち自身の格率がどうであろうと、わたしたちはこの原理にもついで自分の行動と他人の行動とを、よいこと、あるいは悪いことと判断しているのだが、この原理にこそわたしは良心という名を与える。」⁽²⁾良心は孤独な生活における自己の内面への回帰を要求する。第六の手紙は隠れて生きることへの強い呼びかけにおわる。孤独のなかの自由、一切の依存を断った心の中の自由を認めてルソーの隠遁の論理が完成する。それは同時に、敵対者に対する彼の勝利の宣言でもあった。

ルソーは第二の危機から、なにによって立ち直ったか。第一には、書くことによってである。『ダランベールへの手紙』は「わたしの命を救った」と自らしるしている。⁽³⁾書くことによって生活を調整する、というルソーの方法がこの時期に明確にできあがった。

第二は、隠遁のこのましい生活を徹底することによってである。孤独が創作のためのバネとなった。次の二つの引用を見ていただきたい。シャルメットとモン・ルイを結んでルソーの理想生活のイメージは定着する。森と小川と小鳥たちが、ルソーのこころをつつむ幸福のシンボルとなる。

「森や小川や樹々の緑が、わたしたちの心から、人間どもの視線を遠ざけてくれます。ここかしこ気まぐれに飛び交う小鳥たちが、

孤独の中における自由の範例を示してくれます。⁽⁴⁾

「この深い、こちよい孤独のうちに、森と水にかこまれ、あらゆる種類の鳥の合唱を聞き、オレンジの花の香をかぎつつわたしは『エミール』の第五巻を書いたのである。(Conf. p. 521)

註(1) 『エミール』につき言葉を見いだす。「有徳な人とはどういう人か、それは自分の愛情を克服できる人だ。(…)ある人が他人の妻を愛していても、その不幸な愛情を義務の掟に従わせておこなうなら、それは罪にはならない。」(p. 567—8)

(2) Lettres morales 5, C. G. t. III, p. 366. Emile p. 352
カッコ内は前者にはない。

(3) Let. à M. de Leyre C. G. t. IV, p. 64

(4) Lettres morales 6, C. G. t. III, p. 371.

III

抽象的な思弁の操作によってではなく、つねに現実の体験の中で発想し著述してきたルソーにとって、それまでの体験とはやや異質の第二の危機の経過は、かれの思想にも大きな痕跡を残さずにはおかなかった。わたしの指摘したのはそのうちのある部分にすぎない。ルソーの変化した側面のみが強調されたが、かれが一面から他面へと全面的に移行したわけではもちろんない。その後において、『コルシカ憲法草案』や『山からの手紙』が書かれているし、何よりも『社会契約論』を完成させている。しかしルソーの生涯と思想

の歩みを巨視的にみた場合、そこに一つの転期をみることは、やはり正しいと思う。『孤独な散歩者の夢想』の方向に、一歩おおくフレタといつてよい。もちろん『夢想』にいたるまでにはもう一度大きな山を越えねばならぬ。あらたな契機はあらたな闘いをうむ。この時期には、ルソーはまだ次のように言い切る自信があった。さきに引用したトロンシヤンあての主張のすぐつぎである。「わたしは、公衆はあなたのようにきびしくわたしを裁きはしないと確信しています。そして、一般に人々は、とりわけ不幸な人々は、わたしを彼らの敵とは見なししていないと信じるにたる機会を、毎日、もっているのです (t. IV, p. 201)。」

われわれは、『クララン』や『エミール』終章に示唆される閉鎖的な小社会の幸福像を、『不平等論』などとの対比を念頭におきながら、ルソーの転期と結びつけて考えてきた。それは必然的に『新エロイズ』や『エミール』の弱点ともいえる部分を強調することとなった。そこでは政治的社会的方向における人間の全面的解放をめざしたルソーの挫折という事実は、客観的には避けられないであろう。いうまでもないことだが、『新エロイズ』や、とくに『エミール』は豊かな書物である。レルミタージュにおける経験をへて、人生の個々の事象の細部にわたって充実した思考を展開したこれらの書物の豊かさや、『エミール』の戦闘的な主張の意味を照らし出すことは、この小論のよくするところではない。別の視点が用意されねばならない。しかし、次の問を提出することは私の仕事に属する。エミールやクラランのあの明かるさは何に由来しているか？そこに挫折の意識が全くないのはなぜか？ルソーはそこでむしろ第一義的な

ものを確保したのではないかとすれば、それは初期論文にみられる理想と異質のものか否か？

クラランの幸福を集約的に表現したとおもわれるジュリの言葉がある。

「わたしは親しい方々に対する愛情と、親しい方々がわたしに報いてくださる愛情と、親しい方々がお互いに抱き合っておられる愛情とを同時に享樂している。あの方々の相互の好意はあるいはわたしに由来するものであり、あるいはわたしに関係するものである。わたしの眼に映るものは一つとしてわたしの存在を拡張してくれないものはなく、わたしの存在を四分五裂させるものはない。わたしの存在はわたしを取巻く一切の中にあり、どの部分もわたしから遠く離れているものはない。(…)わたしたちの間に支配しておりました交りの魅力はすべて心の開放の中にあるということをお認め下さいませ。それはあらゆる感情、あらゆる思いを共通にし、また各人が自分は義務の命ずる通りにしていると感じながらも、あるがままの姿をすべての人に示すようにさせるのです。」(VI—8)

われわれはこのジュリの言葉に、かなり深い意味を持たせて読むことができる。こころみに一行一行について、その反対の意味の文章を作っていただきたい。ルソーとわれわれを結ぶ疎外のイメージがうかびあがるであろう。

「心の開放の中にある」人間関係、実体とあらわれの一致、現実には孤立して分裂した存在ではないが、人間は、本来、人間相互のつながりの中でその全体性を発露しうるはずであるという認識、こ

れらの主張が初期論文いらい一貫した底流をなしていることは、スタロバンスキーの指摘をまつまでもない。少し注意してよめば、それが、ルソーの個人的体験と理論展開との接点としての位置を占めていることに気づく。第一論文ではそれがもっとも素朴な形であらわれている。

「外にあらわれた態度がつねに心の性向のうつしであるならば、人々の間で生きることが甘美なものであらうに(すむ)。」「人々は互いに、容易に相手の心を知りうるということにおいて、かれらの安全を見出ししていたのである(すむ)。」文明社会の劃一性によって人間の行動様式は固定する。だれも実体を表面にあらわさないから、誰を相手にしてよいかわからないし、危機の時がこなければ自分の友も識ることができぬ。「この不確実」が友情、尊敬、信頼をうばいあらゆる悪徳を生む(sciences, p. 5)。第一論文の混沌とした批判は、第二論文の歴史と社会の立体的構図に展開する。それ以後、ルソーが幸福のイメージをえがくときには、何等かの意味において、右の諸点を解決したものである。第一論文と第二論文を「素朴な生活の使徒」個人主義者ルソー、『社会契約論』を集団主義、と分割する見方が、マーチンやヴォーンにみられるが、さらにその底流にさかのぼるべきであろう。

ジュリが、人々との全きつながりの中において自己の価値を全的に発露させた、と書いたとき、それは第一論文や第二論文の疎外像とオモテ・ウラの関係にたつ。彼女の幸福像は、『政治経済論』における公教育による幸福な人間のイメージ、『社会契約論』における人間性の基礎からつくりかえられた共同体的な幸福のイメージ、そ

のいずれとも根底においては、必ずしも異質ではない。異なるのは回復の方法である。

ルソーのこのような人間性の基底にさかのぼる批判が、第一論文や第二論文の形をとってあらわれたとき、当時の人々はほとんど理解しなかった。エルヴェシウスの『人間論』をよめば、サロン派のエリートたちがルソーをどう見ていたか、およその見当がつく。歴史の主流となることを目前にひかえていたブルジョアジーおよびそのイデオログであるフィロゾフたちは、ルソーが否定した孤立化した個人、他人にたいして一定の距離と秘密をいだいてまじわりながら自己の利益を追求する個人に、自負と自信をいだいていた。その欲するところをいっそう自由になすところに、その直線的な進歩改良の実現において、人間の幸福をみていた。ルソーとこれらの人間観の基本的な対立は、そのよって立つ階級の相違という点には還元してしまうことのできない要素をもっていた。ルソーという特別の個性の、きわめて深いかわりがそこに認められる。しかし、ルソーが人間の全的な回復を要求したとき、客観的には、それはきたるべきブルジョア社会にたいする批判を内蔵していたのである。人権宣言はモナドの自由であって人間を結びつける自由ではない、と初期のマルクスが下した批判（『ユダヤ人問題について』）を、ルソーはかれ独自の視点でなほどこさきどりしていたといえる。

百科全書派の主張の實現はほどなく日程にのぼりうるものであった。ヴァンセンヌへの途上の「発見」いらいルソーが育てた希望は、実現しうる素地をもたなかった。ルソーが思想の独自性を主張するとともに不和は現実となった。思想の相違は、個性にもとづく

個人的な葛藤を通して、直接的な憎しみとなり敵対となる。憎悪はさらに思想をゆがめつつ、その相違を決定づける。孤独は必然であった。

隠遁者ルソーに残された方法は「自然の人間を社会に同化させることによって損傷するようなことをしない（V—8）」クラランのそれであった。人物の問題と心の中へのよびかけが一次的な重要性をもった。「隠棲の妙味を感じるには健全な魂が必要で（V—2）」。ジュリの子供は『エミール』の教育をうける。エミールは『ジュリ』の生活へと入ってゆく。それは次の社会認識に裏うちされている。「けっして他人に害を加えないこと、という教訓は、できるだけ人間社会にしばらくしないようにすること、という教訓を含んでいる。というのは、社会状態にあつては、ある者の利益は必然的に他の者の害になるからだ。この関係は事物の本質にあるのである。なにもものもそれを変えることはできない⁽³⁾。」おわりの行のベシミスムに注目していただきたい。もっとも、後期のルソーがこのような発想にいつも規制されていたと考えることは正しくない。私

は一つの時期の一つの局面を注視しているにすぎない。

孤独な隠遁者にとつて、社会矛盾が並列的に把握されるのは避けがたい必然である。矛盾を構造的に立体化させ、弁証法的な対立に追いこんだルソーの論理は崩れたかにみえる。社会思想家として客観的に見たとき、それが後退であることは、すでに述べた。しかし、同時に、ジュリの幸福像は、ある意味で第一論文いらいのルソーの理想の延長線上にありえたのである。それは選ばれた少数者の幸福であった。ルソーは孤独のうちに、客観的には疎外の過程の進

行のうちに、むしろ自由の獲得の可能性をみた。その多くは希望態においてであるが、この逆説的な事実は認めなければならない。それがクラランの自由であり、エミールの自由である。孤独なたたかいは経てきただけに、ルソー自身の問題でありかれ自身が証人であるために、その正当性には強い確信があった。クラランや『エミール』後半部が、逃避的な構造をもちながらも、自信にみちた自己主張につらぬかれているのはそのためである。(64・10)

註(1) De l'Homme. 第一巻第八章、第五卷第九章など。グリムは第一論文につづく論争で、ルソーの論敵が強力でないのを残念がった。(Fable, op. cit. p. 171)

(2) Emile p. 99 の註。ディドロを意識して書かれたことばである。